

Nov. 21, 1984

ユー・エス・エー

私は1982年8月から1年間アメリカに滞在する機会を得た。ここに示すものは、私に触れたいくつかのアメリカである。

Hi! と軽薄、短小、ネアカな気分を忘れずに読んで下さいね!

1. UCバークレー

私はカリフォルニア大学バークレー校に一年間滞在した。カリフォルニア州にはあちこちに10近くの州立大学があり、それらは全てカリフォルニア大学と呼ばれる。各大学を区別するためにカリフォルニア大学の後に所在地を付ける。カリフォルニア大学の内もっとも有名なのはロスアンゼルス校である。ロスアンゼルス校はロスアンゼルスがLAと省略されることからUCLA (University of California Los Angeles) と呼ばれる。日本における知名度はUCLAに劣るが、学問レベルの高さではUCB (バークレー) が全米一と言われている。ノーベル賞授賞教授が20人近くいる。こんなことはどうでもよいことで重要なことは、UCBが自由の雰囲気にあふれていることである。アメリカは自由の国であるがUCBは自由の中の自由というのがふさわしい。1960年代、フリースピーチ運動 (大学学生運動)、ヒッピー、ベトナム反戦運動の発祥地であることからわかるように、UCBの伝統は伝統を打ち破ることといった感じである。

人種的にも白人、黒人、東洋人と様々な人々が集っていて、まさに人種のるつぼである。普通アメリカの大学というと広いキャンパスに校舎や寮が散在し、静な学園都市を連想するが、UCBはだいぶ違う。キャンパスは繁華街と隣接していて、どこまでが大学で、どこまでが市街地か区別がつかない。大学の中に乞食や大道芸人やあやしげな奴もいくらか歩いている。そのため犯罪も少くない。私はものごいに何度も出くわしたし、婦女暴行、夫男暴行 (ホモによる) も少くない。夜は通るべき道路が指定されているくらいである。こんなことがある種の緊張を与え、強さの源とも考えられる。

バークレーのライバル校として、車で1時間ぐらいのところにスタンフォード大学がある。これは美しい大学でキャンパスは好対照である。授業料が非常に高いこともあり、学生もUCBの学生と比べるとどこか品が良い。私はテニスの対抗戦を見にいったが、スタンフォード大学は男女ともおそろいのユニフォームに身をつつんで整列するのに対し、U

UCBはバラバラで、ひどい奴になるとテニスウェアも着ずにジョギングパンツの者までいるという始末。でも自由と開拓精神はUCBに生きている。日本だと大学は1つの家の様な感じで、暖く心安まる所といった感じであるが、UCBはどちらかといえば日本の専門学校の様な雰囲気である。排他的なところはない。だれでも勝手に来て学べばよいといったふところの広さを感じさせる。教室へ犬をつれて入るものも多い。20人位の授業中でも前の席に足を上げてパンを食いつつ授業を聞いている者もいる。これを不謹慎だと言って心を閉じてはいけない。“UCBでは全てが許される”と教授が笑っていた。ネアカにハッピーにやろうという気分なのだから。

このようなことだから卒業式は皆勝手なかつこうで来ることを期待したが、私の出席した工学部のものでは全員おそろいの黒服。これには少しがっかりしたが、知り合いの者が行っている社会学科では普段着のまま集り、議論をして終わったというから素晴らしい。カリフォルニアの丘の斜面に散ばった校舎、カリフォルニアサンシャイン、ユーカリの香り、遠くにゴールドゲートブリッジ、そんなところである。

2. カストロスクール

長女はカストロスクールという小学校の3年生に入つた。娘には全く英語を教えていなかったのだが、小学生ぐらい言葉なしでも何とかなるだろうとあまり気にならなかった。学校では毎日一時間、英語の授業があり、外国から来た人達はここで英語を教わる。

まず雰囲気をつかんでもらうために登校風景から。女の子は小学校一二年生でもマニキュアをつけたり、口紅をつけたりしている子もいる。ピアスを付けている子も少ない。概して東洋系の子は潑刺とでかけていくのに対し、白人、黒人の子はノンビリ、体から力がぬけた様な感じで出かけていく子が多い。もちろん目をらんらんと輝かせた白人の子もいないわけではないが。テレビでよく見るように教科書は学校に置いてあり、2、3冊の本と弁当箱を持っていく子が多い。昼食は弁当を持っていってもよいし、食券を買っておけば学校で給食もある。また家へ帰って食べてもよい。

学校内は自由の雰囲気があふれている。初めて子供を連れて学校へ行くと、生年月日からクラスを決めて、何の書類も要求せずに入れてくれる。校長先生は40才くらいで、校長室のでっかい椅子にふんぞりかえ

っているかと思いきや、いつ行っても事務室の入口辺りにうろついている。私は始め彼を校長とは思わなかった。せいぜい受付のおじさんといった感じで、いつもにこにこしている。帰国後、担任の先生から貰った手紙によると博士（校長）はバークレーへ勉強の為に戻ったというから、校長は権力にあぐらをかいている様なものではない。校長がこんなふうだから学校は明るいのんびりした雰囲気である。誰でも受け入れる大きさを感じさせる。私はこの雰囲気が何より気に入った。

私の娘は小学校3年生であったのでアメリカの学校だけでも良いと思ったがサンフランシスコに土曜だけ開かれる日本人補習校があるというので、ここに通わせた。この学校もアメリカにあるというので自由な感じなのだろうと思って連れていったら No ! 校内にはピンと張りつめた何か生徒を威圧する様な雰囲気が漂っている。私は忘れていた日本の小学校を思い出した。生徒は廊下でふざけているとすぐ注意され、生徒はハイとすぐにたす。私は軍隊に入った様で、いやな気分になった。校長に会うとクラスはすぐ決ったが、まだ私の方の書類に印がないので書類が整ったことにならず本日は授業を受けられないという。1時間もかけていったのに私は頭に来た。アメリカの学校が、どこから来たのかかもしれないしかも予防注射も済んでいない子をその場で受け入れたのに対し、日本人学校は書類が不備ぐらいで授業を受させないのだ。少し喰いさがったが頑固なのであきらめ、3年生の担任に不満を言ったら校長は頭が堅いから、構わないから授業を受けさせていいですよ、というのでなんとか授業は受けられた。私は折角アメリカに来てこんな雰囲気を子供に味わわせたくないのだから子供にやめるようすすめたが、子供は日本語が使えるのが嬉しいらしくやめなかった。

アメリカの小学校には外国から来た人のための英語クラスがあり、英語担当の先生があちこちの学校をまわって英語を教えている。我々の様な一年しかいない様な者の子にでも教えてくれるのはありがたい。

学校にはカリキュラムがある様なない様なもので、生徒は学校へ行くとい日のドリルを貰い自習する。すべてにのびのび、のんびりといった感じで、日本の一斉授業とは様子がだいぶ違う。一斉のほうが効率は良いが、おちこぼれたらなかなかついて行けないであろう。

カストロスクールのクラス編成は、同じ年の子でも出来、不出来によりクラスが異なり、例えば3年の場合なら出来ない子は3年生クラス、出来る子は3、4年生クラスに入る。又算数と美術には特殊クラスがあり、優秀な生徒を集めて特別授業をしていた。

この様に自由な素晴らしい雰囲気なのであるが問題点がないわけではない。一つは教育レベルである。特にアメリカ人に言わせると中高校の教育レベルが低いため、アメリカ人が大学の理科系など難しい学科に入れないという。もっとも文科系の学生に言わせると、東洋系の人々が理科系に多いのは英語が下手なので文科に入れないのだと言っていたから両方正しいのだろう。

教育レベルの低さの一つの原因として先生の質が最近問題になっている。1983年にカリフォルニア州で初めて先生になるためのテストが行われた。この時同時に既に先生になっている人のレベルを調べるため、先生達を無作為に選んで、成績によって職を失うことがないという条件でテストに参加してもらった。テストは読み、書き、算数の3科目である。新聞に出ていた問題の1例は次のようなものでたいして難しくない。

算数の問題

n が 602 の 48% の時 n はいくつか？

次の近似式のうち値が n より大きくなるのはどれか

(1) 0.48×600 (2) 0.50×600 (3) 0.50×602

(A) (1)

(B) (2)

(C) (3)

(D) (1) と (2)

(E) (2) と (3)

算数は 65% 正解で合格。

合格率は次のとおりで、人種別の成績も示されていた。

	受験者数	合格率
計		65%
先生	1244	57
代用教員	1023	58
大学生	4445	71
白人	4786	75
アメリカインディアン	80	73
アジア人	315	53
メキシコアメリカン	502	31
西インド諸島	176	40

黒人	399	23
その他／無回答	454	61

性別の合格率は女性の方が上であった（女性66%、男性64%）。
たしかにこの程度が出来ないとなると不安である。教育は難しい問題である。

3. ピーターパンナーサリー

アメリカでは小学校入学前の1年間キンダーガーデンという小学校に付属した幼稚園に通うことが義務付けられている。小学校入学前2年以上の人が入る幼稚園をナーサリースクールという。私の次女は4才であったため近くのピーターパンナーサリーへ行くこととなった。ナーサリースクールにもいろいろあって費用が高いものは、日本の幼稚園と似たシステムであるが、私の子が入ったのは学費が安いものでだいぶ日本の幼稚園と様子が異なる。先生は1人で、お母さんが週2回手つだいに行って遊んでやったり、おやつをあげたりする。お母さんが行けない時はお父さんが行ってもよい。私の日本人の友人は奥さんのかわりに幼稚園に行き、絵本を読んでやったら、子供達があきれて去ってしまいみじめな思をしたそう。女房に聞くと本を読む人はキッスイのアメリカ人だけらしい。父母の義務は昼間の週2回だけではない。月2回、お母さん方が幼児教育の教育を受ける義務がある。これは夜のため私が参加することとなった。内容はその時々でバラバラであり、ある時は遊戯の方法を教わったり、クリスマスパーティなど、催し物の準備であったりする。最初私は一番前に陣取っていたら、やたら先生に意見を聞かれるので閉口し次回からは、一番後に座ったらよく話が聞こえなかった。英語が下手な上に幼稚園用語がけっこうあってわかりにくい。

そんな中で大変面白かったのがあるので、一つ紹介しよう。それは幼児の性教育という講座であった。これは、映画を見せてそのあと先生が話をする。先ず最初のテーマは“子供はどこから生まれるの？”という質問にどう答えるかである。正解は“足の間に赤ちゃんが出てくる所が有り、そこから生まれるのよ”。これがドラマの中で示される。ドラマの中の母親は自信をもって答えているのに、父親は変な笑みを浮かべたり自信なげな態度が印象的であった。

第2は、夫婦の寝室をのぞかれた時の対応である。正解は、“人間にはそれぞれプライバシーというものが有り人の室にだまって入ってはいけない”としかる。日本では公明正大ということが好まれプライバシー

というのをあまり教えない。隠れてする行為は悪いものという観念があるが、この辺はだいぶ様子が異なる。アメリカでは子供のうちからプライバシーという概念を教え込んでいる。

第3は子供の自慰行為である。これに対してどう指導するか。正解は“そういうことは人前でやってはいけないので自分の室で見えないようにやりなさい”。ちょうど鼻くそを取るのと同じようなものらしい。

4. 少しアカデミックに

私はVisiting scholar（訪問学者）という資格で大学に滞在した。大学での生活は特に制約されるものではなく、自由である。私は受入れ担当教授の研究プロジェクトが一段落着いたところであったため、大学側からの義務もなく面白そうな授業に出たり、週一回行われる研究室のミーティングに顔を出していた。大学ではいろいろ気付くことがある。私は大学院の授業に出ていたが約半数が非白人である。特に中国系が多かった。先生は外国から来たと思われるなまりのひどい先生が多い。現在アメリカの大学は給料が安いので大学の先生になり手がなくてこまっている所が多いが、バークレークラスになれば1つのポストに10人ぐらいが応募してくる。しかも助教授、準教授、教授と階段を上っていくのは容易なことではない。大学の先生は大変良く勉強している。最新の研究を実に系統的に整理して教えていた。授業内容が大変良い。私の専門分野でいうと私が3ヶ月ぐらい前に読んだ新しい研究論文が、授業の中に系統的に組入れられて説明されていた。そんなわけでこの授業（週2回で一学期）を終えると、生徒達はなまいきにも最先端の研究を一人前に議論するようになる。これに比べると日本の大学院の授業は大学の延長で、既存の知識を教えているといった感じである。研究に関して日本では先生や先輩の方法を見て学ぶ、いわゆる徒弟制といった感じで効率が悪い。徒弟制ではアメリカの学生が半年位でマスターすることを3年位かかることになる。

この様に新しい研究を系統だてて整理していくのは先生もなみたいいてい努力ではない。このことは先生も認めていて自分の授業を自負していた。ある授業ではいくつかの研究グループを作り一つの方針の計算機を設計させていた。これらの研究グループで設計されたものの内最もよいものが実際のLSIで作成され今年（1984年）の計算機学会で報告された。

この様に世界中から集まってくる優秀な人々によって支えられている

アメリカの大学に、日本が独創性で競争していくことは容易ではない。日本でよい研究が生れないというが、アメリカと日本ではなく日本と世界の比較として見ないと日本に不利である。

それでは日本の計算機の状況はどうかということを少し紹介しておこう。現在スーパーコンピューターといわれるものでは、日本の3社のものが速度の点で大変優れている。又故障の少なさもアメリカをぬいている。バークレーで、日本へ計算機の事情調査に行った人の講演があった。彼は日本の計算センターの計算機室の電気が消えていたことに驚いたそうである。アメリカでは計算機のどこかがいつも故障しているので保守員がいていつも明るいそうである。この後このことについてアメリカ人からよく質問された。又日本は半導体の分野も優れていて半導体国際学会では約1/3ぐらいが日本の論文である。もっともソフトウェアの分野等思想を争う分野ではまだアメリカにおよばない。10年後はどうなっているのだろうか？独創技術が日本で生まれないのは、いろいろ言われるが、こんなことも考えられる。昔ヨーロッパに産業革命が起った頃は、物理化学の発明、発見そのものが、利益に結びついたのではないか。日本が競争に参加したのは理学がほぼ完成された後なので、日本人は既にあるものをうまく組み合せ、西洋人は昔の慣性で利益が少くても真理追及に主力を注ぐのではなかろうかと。

5. アメリカの日本人

アメリカでは、日本ではなかなかめぐり合わないようないろいろな日本人に会う機会が有った。

彼達はいくつかのグループに分けられる。先ず第1のグループは私と同様に1年位の予定で滞在している人々である。私の大学の同じ階にこのような人々が3人いたし、家の近所でも4家族位いる。この様な人々には大学関係者や、研究所に勤務する人がほとんどである。お互に他国の地に不慣れで不安もあり、パーティ等を催して親しくつき合い情報交換を行った。大学の先生方は日本では聖人君子として通っている人々であろうがアメリカでは人間的な一面をかいま見ることが出来る。ここに少し面白半分には彼等のバクロ記事を書いてみよう。

A. Bさんはいずれも大学の先生であるが、Aさんは奥さんの自動車の筆記試験に立会い、隣で教えてカンニングでつかまり試験用紙を破り捨てられた。Bさんは、自動車のテストコースを調べるためテスト車の後をつけ、つかまり名前を書かせられた。という私も女房の自動車テス

トに付きそって、ヘッドライトを上げるのはどれかという質問に、日本語で通訳するような顔をして答を教えた。この時ほど日本語が便利と思ったことはなかった。

日本人で独身の人はいない外国へ1人で来るが、ヨーロッパ人はボーイフレンドやガールフレンドを連れて来ていて、“一人ですか”と聞くと全くわるびれずにボーイフレンドと来ていますと答える。進んでいると思えるが日本人だって粹な人もいる。Mr. CさんとMrs. Dさんは共に大学の先生で単身で渡米されている方々であったが、お二人で幸せな一時を送っていたようである。

もちろんここに御登場いただいた方々はいずれも大変良い方々で親しくおつき合いさせて致した方々です。尊敬しているからこそ書せて致しました。皆さんゴメンナサイ。

第2のグループは日系人である。一世の方々は戦争を経験され大変な御苦労をされた方々である。一度庭師をされている日系人の家へ招待されたことがあったが御主人はただ一言“苦労しましたよ”とだけ語ったのが印象的であった。又別の日系人に車で送ってもらう途中、“こちらに長いのですか”と聞いたら、狂った様にアクセルを踏んだのを思いだす。戦後生れの二世たちはあまり日本語を話せない人が多い。これは戦後日本語を使うのがはばかれた時が有り、この影響である。しかし最近では日本人は日本語を知っているべきだとの認識が強くなり、自分は日本語ができなくても子供三世には日本語を習わせている人もいる。文化は一度とだえるとなかなか継承するのはむずかしい。

中国系学生同士は大学で中国語を使っている場合が多かった。その他、アメリカの会社へ勤務している人、アメリカで店を開いている人とも会ったが交友は少なく一般論として語れるほどのことはなかった。

日本人とアメリカ人の最も大きな違いの一つは体型である。私の様な純日本的な体型をしているといくつかの悲哀を味わう結果となる。先ず最初に味わう屈辱は男性用トイレの便器の位置が高いことであった。又幸か不幸か自分の姿が見えないのでアメリカ人ばかりみていると自分も足が長いような気で暮す結果となる。ところがたまたま自分の全身を見る鏡があるものなら、もうびっくりする。

またこんなこともあった。アメリカ人はハンティング帽子をよくかぶっていてなかなかきまっている。私もこれは良いと思いさっそくデパートへ行って頭にのせて鏡を見たらアンパンの上にアンパンを乗せた様なかっこうになり鏡をのろって帰って来た。

日本人は足が短いばかりか腕もみじかい。服を買うとき胴で合わせると腕が長くなる。私は止むをえず胴で合わせて腕をまくって着たが、私の知り合いの人は外国で急いでいて腕を合せて買ったら胴が合なくて着られなかったというから御用心。男ばかりではない。前に出ていただいたAさんの奥さんはアメリカ的なよい服が有ったと言って上半身エプロン式ワンピースを着てこられた。これが正面から見ると外人的な胸の形になっているのだが、横から見ると胸あての胸の形と体は独立で、胸あてと体の間からむこうがわが見えるという恐ろしさ。またBさんの奥さんはハカマをはいて来られたので日本文化の普及に努力されているのかと思い聞いてみると、アメリカで買ったジーンズの裾を切っただけとのことであった。

体の柔らかさも西洋人とは違う。日本の女性がハイヒールでうまく歩けないのは体の柔らかさがないのと、数千年の農耕の歴史の為背骨がまっすぐで腰のところでそっていないためのようである。新体操の外国選手の体の柔らかさをみれば納得されよう。ついでに言うと西洋人は牧畜民族なので雨が降っても平気で傘もささずに歩いているものが少なくない。アメリカ人だって欠点はある。一つは肥満である。ヨーロッパ人がよく食べる友人に“そんなに食べるとアメリカ人みたいになるぞ”と言っていた。おしりを見たのでは前か後かわからない人も少なくない。清潔感も日本人の方が勝っている。西洋人は靴で家の中に入るのも不潔だ。トイレで床に座り込んで靴のひもを直している人もいるし、トイレの個室から出て来ても手を洗わぬ者も多い。そんな人が前にいると私など次の人がトイレに入ってきてドアが開くまで待っているしかない。手づかみで食べるのにも抵抗がないようで、又食べたあとよく指をペロリとやる。どうもアメリカ人はバイキンに強いらしい。

だいぶ人類の欠点ばかりあげてしまった。本文の品位をこれ以上上げないためにこの辺でstop。

6. 報道について

アメリカでは新聞の定期購読者ではなかった。新聞は週末スーパーで売られる週末版を買った。情報源はもっぱらテレビであった。特にニュースショーは毎日欠さず見ていた。理由は簡単でわかり易いのである。画面を見ていれば大体内容はわかるし、出来事は何日か連続して状況変化が報告されるので、同じ様な内容が毎日語られる。アメリカのテレビニュースを見ていて気付くのは世界の情勢が良く見えることである。一

つにはアメリカと世界とのかかわりが多いこともあろうが、世界の様子を一つの出来事について何日も継続して報道されることが多く、流れが良くわかるのである。日本ではテレビにしろ新聞にしろ外国の出来事は何日分かをまとめて一つの出来事としてトピック的に扱うことが多いので、臨場感がない。例えていえばスポーツの結果だけを聞いているような感じである。又日本での報道は日本人の特派員からのものが多く日本人のフィルタを通して送られるので、どうしても日本的でいけない。日本人の撮る映像は情的である。ある本に中国はコダックのフィルムで撮なければいけないといったのがあった。国産フィルムは肌の色を白くするため赤や黄色が白っぽくうつりウェットな感じになるそうである。ニュースもそんな感じで、アメリカの方が機械でとったニュースという感じであるのに対し日本のものは人間がとったものという感じがする。ある日本の新聞で法廷に入っていく人の写真に“うつむきながら入廷する××氏”というコメントがあった。何かわざと本人の心の暗さを暗示しているような表現であるし、テレビではしばしば悲しんでいる人をアップでうつす。やりすぎだとも思う。

そこで提案。世界情勢を毎日連続的に報道する新聞があるとよいと思う。もちろん日本人の特派員を通して見たものではない。外国の通信社のニュースを出せばよいだけである。また、外国の新聞の日本語版を出してはどうか。きっと売れると思うのだが。どうも日本にいと世界が見えないのである。もっともあまり世界情勢が見えると危機感を感じたりする。アメリカではビルに核戦争になった時入るシェルターが有るか否かの表示がある。又非公式のものであるが、一時電車の中に核爆弾が落ちた時の対処の仕方がはり出された。さすがにこれは、危機感をあおり過ぎるという理由で撤去されたようである。世の中なるようにしかならないのだから日本の様に見えない方が安心できてよいのかもしれない。“知らぬが仏”か？

テレビの話がでたついでに娯楽テレビの話をする。サンフランシスコ付近では日曜の朝と夕方日本語放送もあった。ニュースの週間ダイジェストやNHKの大河ドラマ、水戸黄門などが放送され、我々も“この紋どころが目に入らぬか”てなことを言い合うようになった。アメリカのテレビでは日本のテレビの夜の番組のようなものはないが、私の見た映画の放送はhearそのままかなり長時間映されたこともあった。

7. 英語教室

アメリカで英語が通じないのは日常茶飯事でとりたてて言うことでもないが簡単な事が通じなかったり、わからなかったりするとがっかりする。ここに簡単だけれどわかりにくかったいくつかのものをあげよう。

まず我々は初体面の人にはHow do you do?と言う様に習っているがアメリカではNice to meet you. と言う人が多い。一寸ちがうNice to see you はやあコンニチハ。お別れの時はIt was nice to meet you となる。

私を最も悩めたのはHow are you doing?である。これは何なのか、これはHow are you?と同じこと。我々はHow are you?しか習わないがHow have you been?なんて言うこともある。これがわからないとすぐ外人とわかるそうである。

What time is it?だって、こんなふうに聞かれるのは10回に1回ぐらいである。私はアメリカへ行って間もなくドウ ユー ノウザ チャイニーズと聞かれて、中国語を聞かれているのかと思いきやチャイニーズではなくタイムイティイズであった。正確にはDo you know what time it is?。Do you have the time?とかHave you got the time?等と言われて何度も面くらった。もっともこれはわからなくても相手は腕時計を指さしてくれるので必ずわかるのだが。

日本語になった英語のためにかえってわかりにくいのも少なくない。たとえばマヨネーズはメヨネーズに聞えるし、マスタードはメスタードと聞える。ケチャップはキャッチアップと聞える。コヨーテはカウヨーティ、ハイエナはハイイーナ、バンクオブアメリカなどベンコブメリカと言わないと通じない。ヨーロッパの固有名詞は英語読みされる。オーストリアの首都はヴィエナ、音楽の父バッハはバックと呼ばれる。日本語の訳が優れていて米語を連想できないものもある。例えば自由の女神はGoddess of freedom かと思えばStatue of liberty (自由の彫刻)である。

しばしば混乱するのは0.5か1.5かである。A half hour が30分でhalf an hourが1時間半。これも突然言われると混乱する。女房が布を半ヤード買おうとしてhalf yard, half yard と何回言っても通じない。正解はOne half yardである。

Zの発音もなかなか難しい。日本人がZを発音すると、はじめ舌が上あごにふれて、ツの混音になりやすい。Zは舌を上あごにつけないで発音する。スの口のかまえで音を混らせなくてはならない。

否定疑問は時々ひっかかる。否定と肯定での解が日本語と逆になる。私はよく間違えるので先生にこのことをいったら、よく間違えますねど！はっきり言われた。

又お金がからむ契約の時などはつい慎重になって何度も聞き返した。すると隣の人に、“この人あまり英語がわからないのよ”なんて言ったりする。なぜかこういうのは早口に小声でしゃべられてもわかってしまう。耳の遠い人の老人の悪口は近くで言わない方がよいですヨ。

8. 一日を何歩で歩くか

アメリカ人からはよく“楽しくやっているかい？”と声をかけられた。どうもアメリカ人は楽しくやることが最高の人生と見ているように思われる。多民族の共通する価値は楽しくやるということになるのかもしれない。私の部屋に、ある先生が水の事故でなくなったという紙が張ってあったので読んでみたら、文末に日本だと御冥福をお祈りしますというところに、“ともかく彼は生前楽しくやっていた様に思う”と書いてあった。人間最期にふりかえって価値のあるものは楽しくやったかどうかであろう。金や名誉は楽しくやるための一つの手段ではあるかもしれないが。

さて楽しくやることを考えてみよう。アメリカで気が付いたことは、アメリカ人と日本人の1日の過ごし方である。アメリカ人は一日を3歩で歩いて、日本人は2歩で歩いているのである。アメリカ人はまず朝起て8時ごろ会社へ行き5時に帰る。6時から12時まで自分の人間生活を楽しむ時間、12時から朝まで寝る時間である。日本人は8時に会社へいき8時か9時ごろ家へ帰り、あとは寝る時間である。アメリカ人の第2歩“自分の時間”は大切である。ここで会社とは別のコミュニティに参加したりパーティを開いたり、音楽会に行ったり、ということになる。この第2歩は自分のものと考えれば、これを奪われることは苦しいはずである。第2歩を確保するためには、残業なんかやったらいけない。人間を放棄した事になるのだ。日本に比べてアメリカで音楽会や劇場が繁盛するのはよくわかる。1つの生活なのであるから。そこへいくと一日を“労”と“眠り”の2歩で生きている人の心の休まる時は、第1歩と第2歩の間のわずかな時間で、テレビを見る位しかない。だからテレビが繁盛するのである。日本人は労働に喜びをみいださねば生きていけないし、外人は、この連中何のために生きているのかなと思うことだろう。そんなわけでアメリカではエンターティメントなるものが重要な産

業となる。アメリカの芸人の原点は大道芸である。大学内に昼休みともなると何人もの人が店開きしている。店開きといっても自分の前にお金を投げ込む箱を置くだけのことで、後は演技に入ればよい。歌を歌う人、楽器を演奏する人、ロボットのまねをする人、政治放談をする人等である。日本だとこれが乞食というイメージで暗くなり、あまり近付かないがアメリカは大分違う。けっこう学生等が音楽を聞いてお金を投げ込んでいく。私はお金がもったいないのと、さほど上手とも思えないのにという気がして、いつも避けていたが、もっと積極的に心に開いて楽しむべきだったのだろう。どうも我々はブランド指向とか批評精神ばかり発達してしまっているように思う。この精神はコンサートにも通じる。私は音楽が好きなのであるがあまり音楽会に行くのが好きではない。音楽会のあのしゃちこぼった雰囲気がいらいなのである。音楽家は“聞かせてやる”、聴衆は“批評してやる”というような緊張感があり心が開かない。サンフランシスコシンフォニーは皆音楽を楽しみに来ている雰囲気で大変良い。私は、レコードで良いと思ったことのないアルプス交響曲がこれほど素晴らしい曲とは思わなかった。ついでに食わずぎらいのオペラを聴いた。オペラの聴き方にはコツがあるようである。何を歌っているのか知る必要はない。ただ人の声を音楽と同じ効果として聞けばけっこう楽しい。オペラの切符は安くなかったが席は悪く井戸の上から中をのぞくといった感じである。よく見えないのでオペラグラスを借りて来たがあまり角度がありすぎて女性歌手の胸しか見えなかった。

9. “ブリッコ”、君は人類の敵だ

アメリカで素晴らしいと思うものの一つに女性がある。なにも足が長いとか胸が大きいとかいうのではない。態度が堂々としているのである。社会への女性の進出もめざましい。バスの運転手、事務機器の保守、若い女性の土方、工事人。等々。態度も男と対等である。親子の会話をみても対等な、個人として話している。それにつけても情ないのは日本の女性。女子大生の話の語尾とミタイナ。例えば“これだかラー、女子大生はバカだミタイナー、受け取り方ラー”てなものばかり、もっとひどいのは“ウッソー”“ホントー”もう、おまえらまともに話せんのかと言いたくなる。そして“ブリッコ”。なんとなく男の後について物言ず歩いているような女性。みんな同じヘアスタイルで。これが女性解放を阻んでいる。“ブリッコ、君は女の敵だ。”
人のことは言えないが、男だって入社風景と言えは皆紺のスーツに、せ

めてもの抵抗の赤ネクタイ、又この“せめても”の発想が同じで全員赤ネクタイ。モー アホ。！

これは制服を着せられている間に美感が無くなってしまったためではないか？生まれた時から縦じまの部屋でそだったネコは横じまを見えないそうである。

アメリカにいる時はあの学生服は異様に感じられた。日本に帰ってしばらくすると、そうでもなくなるのが不思議だ。

アメリカへやってくる日本人の中高校の女性は皆ダブダブの服を着ていた。不かつこうだなと思っていたが日本へ帰ってみるとマリニルックとかいってはやっていた。娘にはあんなもの着せたくないと思ってデパートへいったらあれしか売ってない。悪いのはダレダ！

日本女性は解放されなくてはいけないと思っていたものが、日本に帰ってしばらくすると又変化する。わたしの良く知っている奥さんは、週2回テニスをやり週1回お花をやり週1回着つけ教室に通う。

そして月1回日曜日“こんな田舎にばかりとじこめられたんじやたまらないわ”などとのたまって子供を置いて東京へ買いものにいく。

女性は解放されていないのだろうか？

本当に解放されるべきは男ではないだろうか？

女性は男性中心社会から解放されていないというなら、男性は労働中心社会から解放されていないのだ。男をたぶらかすブリッコよ 君は男の敵だ。女の敵そして男の敵、ブリッコよ君は人類の敵だ。

10. 自由について

自由というのは誤解を招きやすい言葉だ。定義は束縛されていない状態ということになるのだろう。アメリカは自由の国だというのがメキシコはもっと自由な国だ、法律がないのだから、というのを聞いたことがある。アメリカは自由な国だといっても法律に支配されているから法律に束縛される以外自由な国。ソ連は社会体制に束縛される以外自由な国。さて日本は法律以外自由な国なのだろうか？

私はアメリカで英語会話教室に通っていたが、そこでは世界各国の人々と話すことができる。ある時ある日本人が日本繁栄の要因として終身雇用制を紹介したことがある。私は彼の紹介の後皆ナルホドと感心するかと思ったし、話をした人もそんな反応を予想していたと思われる。しかしアメリカ、カナダの人々は不可解と憎悪の感じを示した。カナダ人は、“若い人々はどうして不満を言わないのですか？”“自分の能力を發揮

できる所を捜したいとは思わないのですか？”と質問をし、アメリカ人は、“自分のやりたい仕事をするし、もっと条件の良い所があればそちらへ行く、それを自由というのですよ。そんなシステムはとても自由とは言えません。”と言い切った。

なるほど本当に日本は自由の国なんだろうか？。少しずつ私の中に疑問がわいてくる。我々をしばっているものに法律以外のものがありそうである。ところが日本に住んでいると慣れてしまっていて見えない。宗教とか社会体制とかははっきりしていないのでますますまずい。この束縛をイザヤベンダサンは日本教だといい、陳舜臣は人間至上主義だという。私は儒教と江戸時代のなごりだとみている。現在はあまりにも徳川時代に似ている。幕府は政府に、藩は会社に変わっただけに見える。5人組という互に監視し合う体質も生きているし、精神的には罪の連座制や村八分も残っている。島国根性、排他的なわばり根性、地位は椅子ではなく私物と考える体質、会社を守るために自殺する社員。どうも形だけ現代だが本質は全て江戸時代のままといった感じがする。とするとだれか頭の良い人が江戸から現代へのうまい着せかえをやってのけたにちがいない。これは主に明治に行われるがその第一歩は勝海舟と西郷隆盛である。江戸城の開けわたしが決まると西郷は“府下のことは何もかも勝さんが御承知だから、よろしくお願い申す”と言って江戸を去った。ヨーロッパに起こった市民革命と明治維新とは似て非なるものである。ヨーロッパの市民革命は社会や産業構造の変化から市民が長い間かかって個人と自由に目覚め変革が行なわれたのに対し、明治維新は外圧と古い藩閥の争いを基本としたものである。たまたま徳川の崩壊がヨーロッパの自由主義の確立と時期が同じただけである。明治の近代化も上からのものであり下からは一部のインテリが外国の思想を頭で学んだ程度である。日本は自我の目覚めが無いまま近代の服を着せられたのである。例えていえばある人が自我に目覚める時期に人と接する機会のない所に隔離され、大人になった時再び社会に出て来たようなものである。不思議なことにこの日本の状態は今の日本人にそのまま当てはまる。自我に自覚する時期偏差値だけの価値感の中で育てられているのである。終身雇用性は江戸時代の名ごりで、これがわれわれを束縛しているのである。社会主義国では体制に縛られて、餓えからの自由を与えられているのに対し、我々は終身雇用性に生活保証され、自由を束縛されているらしい。西洋人から見ると不自由だと思うであろう。あきつ島大和の国がうまし国であることは今も変わらないが、海のむこうには異なる価値感の

下に成立する美国がある。アメリカの自由がまばゆく輝いていることは確かである。

先日、オリンピックの入場行進の際の日本チームの整然とした行進が話題になった。西洋人は自分の思い思いに行動して美しかった。私はそれをみてうらやましいと思った。“心の欲する所に従えどものを越えず”という感じである。孔子の七十にしてのりを越えないのと大分ちがう。孔子がのりを越えないのは体力の減退によるものであるから若い者は、しばりつけないと統制のとれない体制である。不自由で、無理がある。昔中国の人はテン足を美しいと思ったが今は美しいと思う人はいない。美しさというのはそんなものだ。とすれば我々の状態を精神的テン足状態と言えないだろうか。次のオリンピックからは日本も自由な雰囲気で行進するだろう。しかしそれはあくまでも頭で考えて形だけを行っているのであり、いつも心の制御が働いている。こういう状態では外人と接した時自然にふるまうことはむずかしい。いつもこれでよいのかと自問しながら自分の態度を決めることになる。日本も少しずつ変化して来るだろうが、今の教育システムではむずかしい。伝統と紳士の国英国は日本と同じかと思いきやそうでもなさそうである。ダイアナは市立病院で子供を生んだり、ダンスに打ち興じたり、その奔放さで王室の人気を支えている。彼女は自然にふるまっているだけなのだ。私もその方が美しいように思う。

Thank you !